

What is Teaching Portfolio?

東京大学 栗田佳代子

1 ティーチング・ポートフォリオとは

ティーチング・ポートフォリオ (TP) とは、教員が自身の教育活動についてのリフレクションにもとづいて記述された 7-10 ページ程度の本文と、その内容を裏付ける根拠資料から構成される文書です (セルディン 2007)。1980 年代にカナダで開発された「Teaching Dossier」がその原型であり、現在は北米、ヨーロッパおよびオーストラリア等において利用されています。アメリカでは、テニユア制度のもと教育業績の評価資料としてほぼ必須のものであり、広く普及しています。日本では 2008 年の答申 (文部科学省 2008) において多角的な教育業績評価資料の例として言及されていますが、実際には日本では主に教育改善のツールとして少しずつ広まりつつある段階です (Kurita 2013)。

TP は作成の対象となる教育活動の期間や作成の目的により多様です。ここでは、特にリフレクションを重視する、セルディンが提案した TP の流れをくみ日本において普及している TP (栗田 2009) を紹介していきます。

2 TP 作成の意義

まず、TP の作成プロセスは、自己省察 (リフレクション) を促し、それが教育改善につながります。作成者は直近数年の教育活動を俯瞰し、リフレクションを行うことによって、活動の背後にある方針や理念を明確にします。自分の教育の理念を文章として明確にすることで、「自分らしい教師」としての軸が定められます。そして、この理念を実現するための方針や方法をひも付けることで、現実の教育活動をとらえ直します。このとき理念が方法にひも付いていないところなどに気づきを得ることができます。さらに、これらの気づきが、改善すべき目標として定められ、その達成に向けて行動することが、教育の改善につながります。

つまり、TP の作成は、自身のリフレクションによって、教育理念を明確にし、その理念にもとづいた目標設定を行うことで、表層的ではない改善を促します。こうした教育の捉え方をすることで、たとえば、新しい方法をとりたいときにも、実現したい理念との対応による吟味が行われることから、「形だけの導入」に陥ることを防ぐことができます。

以上のことから、作成プロセスにおける自己省察による教育改善へつながることが、TP 作成の大きな意義の 1 つといえます。

また、作成されたプロダクト (成果物) としての TP は、教育活動を多角的かつ質的にとらえ可視化します。この教育活動の可視化が、TP 作成の 2 つ目の意義といえます。TP は教育活動を理念や方針をいかに具体的に実現できているかという形で自己評価を行い、その記述を根拠資料 (エビデンス) で裏付けながら整理します。そのため単なる「量的」な情報の列挙ではなく、教育活動の質について多角的にかつ意味を持って説明する業績評価資料として用いることができます。

さらに、教育活動が TP という形で可視化されることで、他者との共有が容易となります。このことにより、カリキュラムとしての一貫性・整合性を高めたり、優れた教え方、教育理念などの共有により教育の質の全般的な向上が期待されます。また、TP の発信による個人

あるいは組織としての教育力の高さのアピールにも活用できることでしょう。

3 TPの特徴

TPの特徴については大きく下記の4つが挙げられます。

まず、俯瞰的なリフレクションによって作成される点です。単なる事実や活動の列挙ではなく、また逐次的なリフレクションでもありません。TPは一定期間の教育活動について総合的にリフレクションを行うことから、教育活動全体に通底した、より深く根本的な活動の原理にアプローチすることができます。

第2に、経験年数や専門分野を問わず誰でも作成できるという点です。作成者本人が教育に責任を持つ範囲を自ら定めそこからリフレクションを行い、自らの教育活動がもっとも適切に表現される形で目次を定めることができます。このことから、設定された項目を単にうめるタイプの活動の整理方法よりも、柔軟にリフレクションが促されます。

第3にTPは根拠に基づく文書である点です。本文の記述に根拠を示すことで教育業績評価の資料として活用され得る公正性の担保がなされます。特に教育の「質」を評価する場合、「質」を証明するエビデンスをつけるという考え方が重要となります。

最後に、厳選された情報の集積である点です。TPの本文は作成者の教員経験年数によらず7-10ページです。そして、この分量において単なる回顧伝、あるいは教育活動に関する事実の羅列ではなく、作成者が重要視していることを中心にリフレクションし教育活動をとらえなおした文書であることから、自他の読み手にとっては作成者の理念や思考および教育活動が簡潔に理解できます。このことにより、必要十分な情報をTPにおさめることで、更新による教育改善を促す、あるいは教育業績の評価資料としての実用性を高めることができます。

4 TPの構成

TPは、本文とその内容を裏付ける根拠資料から構成される文書です。本文はだいたい7ページから10ページほどの分量になります。ここでは、この本文の構造および根拠資料(エビデンス)の内容についてみていきましょう。本文については、実際の完成したときの一般的な目次の順番にしたがって説明していきます。

4-1 本文の構造

TPの本文には、大きく、「責任」「理念」「方針・方法」「改善・努力」、「評価・成果」、「目標」、という構造があります。この構造は教育活動に対して一貫性を持った枠組を与えるものです。これまで行ってきた教育活動について、活動の範囲をまず「責任」として定め、「理念」を掲げ、「理念」に具体的にひもづく形で「方針・方法」を整理し、さらに「改善・努力」や「評価・成果」について挙げ、そして、現状から理念に近づくための「目標」を設定します。この構造によって、教育活動を理念に連なって一貫性を持った視点で捉えることができます。しかし、実際の目次の見出しや順序はこの通りにする必要はなく、教育活動をもっとも表現しやすい形がかまいません。

以下、簡単に構造の各要素について説明します。

責任 TPにおいてリフレクションの対象となる教育活動となる事実を記述します。期間と

しては作成目的にもよりますが直近の3・5年程度とすることが一般的です。授業科目の他、病院実習の担当、研究室指導、担任、寮の主事、カリキュラム開発、新任教員指導、他所での非常勤講師、公開講座担当、クラブ・サークル活動の監督・顧問、など、自分が教育活動とみなせると考えるものは基本的に含めます。

理念 教育活動における自分の行動原理となる重要な信念や姿勢を理念として記述します。観点としては、どのような学生、看護師を育てたいか、教育者としてどうありたいか、学問をどのように考えているか、などから考えるとよいでしょう。

方針・方法 教育の理念を実現するための方針やその方針を具体化した方法を記述します。自分の教育活動において行っている授業を組み立て方、適用している教授方法、評価方法、学生への接し方などを具体的に記述します。

改善・努力 これまで教育をよくするために行ってきた改善の事項、あるいは日頃教育の質向上のために行った努力について記述します。具体的には、「改善」としてレポート課題評価にルーブリックを導入など、「努力」として、研修への参加や資格の取得、授業方法に関する勉強会の実施、などがあげられます。

成果・評価 教育活動を行った結果としての学生の成長や成果、あるいは、学生・第三者からの評価を記述します。前者の「成果」は、授業前後での学生の能力向上の証拠、学生の卒業論文、研究発表、就職などが具体的な成果として記述されます。一方、後者の「評価」は行った教育活動に対する学生の評価や他者からの評価、教育活動に関する受賞歴を記述するものです。

目標 理念の実現に向けた今後の展望として記述します。短期目標・長期目標を区別し、1,2年で実現できるものを短期目標、5・10年といった長期的なものを長期目標として設定します。

以上が基本的な構造です。この他、管理職ならではの活動や、臨床活動あるいは研究との関連についての言及を追加するなど、基本的には各人の教育活動がもっともよく表現される形での目次を設定すればよいのです。

4-2 根拠資料

TPの本文の記述は、根拠資料（エビデンス）によって裏付けを行います。これは、本文の内容が実態を伴っていることを示し、記述の公正性を担保することが目的です。TPの作成目的が教育業績の評価資料として用いる場合など、教育活動をTPとして他者に公開し、判断をしてもらうような場面においては、重要な考え方です。日本では、TPがそもそも普及途上にあるため、教育活動にエビデンスを求めるといった文化がまだなじみがありませんが、TPの活用における1つの鍵になります。

では、どのようなものがエビデンスになるのでしょうか。ここでの「エビデンス」とは、い

わゆる大変厳密なものをさすわけではありません。例えば、「責任」として記述された授業科目があれば、シラバスがエビデンスとなり、「評価」として「授業評価が平均に比べて高い」という表現があるならば、その授業評価データがエビデンスとして必要になります。

TP における具体的なエビデンスについて、構造の各要素に対応した形で Table 1 に一例挙げました。エビデンスはこれらに限りませんので、各人の記述に応じたエビデンスを用意しましょう。また、エビデンスには個人情報を含む場合があるため、匿名化するなど、扱いには注意しましょう。

Table 1 エビデンスの例

責任	シラバス、依頼状、担当表、開催告知のチラシ
方法	シラバス、授業案、テスト原本、レポート課題、配布資料、スライド資料 板書用ノート、動画、写真、授業評価結果
改善	改善前後の授業案、新しくとりいれた方法についての資料
努力	研修参加証、修了証、資格取得証、勉強会開催告知案内
成果	学生の最終課題例、就職率、就職先、卒業論文タイトル、学生の学会発表
評価	授業評価結果、授業参観評価、学生からのメール、TAによる評価、教育賞賞状、 研究課題採択通知

5 TP の作成方法

TP は一般的に短期集中型のワークショップにおいて作成されます。以下、作成方法についてみていきましょう。

TP の本文は 7-10 ページという分量となり、また、単なる事実の列挙ではなくリフレクションにもとづいた教育活動の俯瞰を行う文書となることから、執筆にはかなり労力を要します。また、TP には「責任」「理念」「方針・方法」「改善・努力」「成果・評価」「目標」という基本的な構成がありますが、この通りの順番が書きやすいわけではありません。さらには、深いリフレクションが促される作成環境が望ましいといえます。

したがって、独力による作成よりもワークショップへの参加などによって他者の支援を受けながら TP を作成することが推奨されています。

日本に実施されているワークショップは集中的な日程で 2 日半にわたるものが一般的です。ここでは標準的なワークショップ（栗田 2009）の進行にしたがって、作成方法を説明しましょう。

Figure1 にワークショップに参加して作成する場合の作成プロセスを示しました。TP 作成のワークショップでは、TP チャートとスタートアップシートという 2 つの事前課題が課されます。TP チャートは A4 判のワークシートで、教育活動に関する事項を振り返ってふ

せんに書き出し、それらを貼って整理することで、教育活動を概観するものです。また、スタートアップシート（SUS）は、TPチャートの事項を参考にしながら設定された問いに文章で回答することで教育活動の俯瞰をより関連性をもってとらえ、TP本文の土台をつくります。

ワークショップにおいては、これらの2種類の事前課題をもとにメンターと呼ばれる作成支援者との1対1の対話を通して、TPの初稿、二稿と推敲を重ねます。そして、ワークショップの終了後にしかるべき期間をおいて第三稿を完成させ、これがTPの作成の1つの区切りとなります。ここで、単に「TPの完成」ではなく「第三稿の完成」としているのは、TPは一度作成したら終わり、というものではなく、この後も更新を続けることに価値があるためです。定期的に更新をし、目標が達成されたかどうかの判断や、理念と方針・方法のつながりをあらためて確認することが、教育改善のサイクルを支えます。

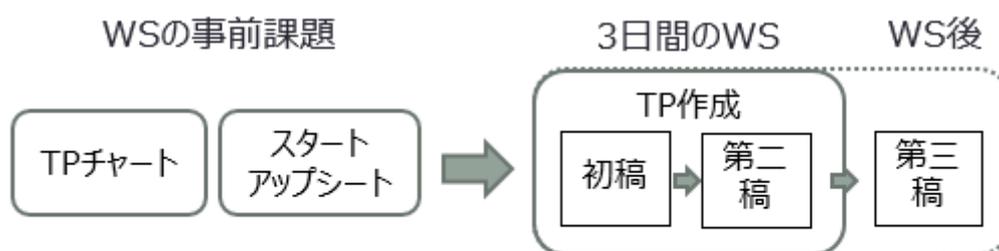


図1 TP作成の流れ

6 おわりに

TPの作成に労力がかかることは事実ですが、自分の教育活動に関する理念を明らかにしてそれを軸に一貫性をもって教育活動をとらえなおすことは、TPでしかなしえないことです。教育のあり方が大きく変わり、教員の存在価値がこれまでになく問われている今、TPによって自身の教育理念を可視化することは学生の学びを促す授業改善活動として、重要性を増すことでしょう。

7 参考文献

栗田佳代子（編）（2009）評価結果を教育研究の質の改善・向上に結びつける活動に関する調査研究会報告書「日本におけるティーチング・ポートフォリオの可能性と課題 ―ワークショップから得られた知見と展望―」大学評価・学位授与機構（access date: http://www.niad.ac.jp/ICSFiles/afieldfile/2009/05/27/houkokusho_tp200903.pdf）

栗田佳代子・吉田壘・大野智久（2018）「教師のための『なりたい教師』になれる本」学陽書房

Kurita, K. (2013) Structured strategy for implementation of the teaching portfolio concept in Japan, *International Journal for Academic Development*, *International Journal for Academic Development*, 18(1), 74-88

杉本均 (1997) アメリカの大学におけるティーチング・ポートフォリオ活用の動向, 京都大学高等教育叢書 2 14-30

セルディン P 著 大学評価・学位授与機構監訳, 栗田佳代子訳 (2007) 『大学教育を変える教育業績記録』, 玉川大学出版部, (Peter Seldin (2004) *The Teaching Portfolio: A practical guide to improved performance and promotion/tenure decisions* 3rd ed. Anker Publishing Company, Inc.)